

広島芸術学会活動報告

二〇〇六年七月～二〇〇七年六月

米 門 公 子

(文中、敬称は略させていただきます)

▼平成十八年七月七日(金)

第二十回総会・大会案内号を兼ねた会報第八十八号を発行。巻頭ページに七月二十九日・三十日に開催する総会・大会のスケジュールを掲載。続いて四つの研究発表の要旨、二つの特別報告の要旨、シンポジウムⅠとⅡの趣旨、パネリスト三名の発表要旨。インフォメーションは七月二十八日～八月二日に開催する広島芸術学会創立二十周年記念芸術展示「制作と思考〈距離〉」と三十日に開催する〈レクチャーコンサート「距離との対話」〉の案内。最終ページには五月十三日の第七十五回例会(野外)報告「三次の地に新美術館オープン!」(津島由里子)を載せた。

▼平成十八年七月二十九日(土)・三十日(日)

第二十回総会・大会を十時から広島平和記念資料館・メモリアル

ホールで開催した。

総会の進行役は大橋啓一事務局長が務めた。最初に金田 晉代表委員が挨拶を述べた。続いて議事に入り、平成十七年度の事業報告を青木孝夫委員、決算報告を大橋啓一事務局長が行った。監査報告は、倉橋清方監査委員が行った。いずれも総意で承認された。引き続き、平成十八年度事業計画を青木孝夫委員、予算案を大橋啓一事務局長が発表し、こちらも異議なく承認された。

十時四十分から大会を開始、午前中に研究発表①近代建築の「transparency」に関する視覚文化史的考察―C・R・マッキントッシュとモダニズム―(川口佳子)②「フィクションにおける意味と指示について―ポール・リクルールの物語論を中心に―」(萩原康一郎)。続いて特別報告①「音楽はいかにヒロシマを伝えてきたか」(原田宏司)が行われた。

午後のスタートはシンポジウムⅠ「ヒロシマの記憶と痕跡のかたち」。パネリストは石丸紀興（広島国際大学）、越前俊也（同志社大学）、岡部昌生（アーティスト）、関村誠（広島市立大学）、出原均（広島市役所・兼司会）。夕方、中区のアステールプラザで発表者を囲み懇親会を開いた。

翌日三十日の午前中には研究発表③「美についての言説の本質的可能性——バウムガルテン、ヒューム、カントの美学理論をてがかりとして——」（伊藤政志）②「寄港地としてのアメリカ——小林千古作品における西洋と日本——」（馬場晶子）。続いて特別報告②「ヒロシマの記憶と美学の将来」（金田 晉）。続いてシンポジウムⅡ「芸術学の変容——周辺領域からの提言——」。パネリストは秋庭史典（名古屋大学）、外山紀久子（埼玉大学）、樋口聡（広島大学）、青木孝夫（広島大学・兼司会）。参加者は二十九日が五十九名、三十日が三十八名。

夕方からはエリザベト音楽大学に会場を移してレクチャーコンサート「『距離』との対話」を開催した。解説・伴谷晃二、ピアノ演奏・伴谷真知子、田中香月、平本恵子、魚住 恵で、司会は馬場有里子を務めた。

なお、七月二十八日から八月二日まで、アステールプラザ・市民ギャラリーで創立二十周年記念芸術展示「制作と思考（距離）」を開催し、当学会の三十八名の作家が出品した。

▼平成十八年十月一日（日）

会報第八十九号を発行。巻頭言は「美学の言説と闘う身体が交差するとき」（大山智徳）。広島芸術学会第二十回大会の特別報告①「音楽はいかにヒロシマを伝えてきたか」（報告・上野 仁）、②「ヒロシマの記憶と美学の将来（報告・田村桂子）。研究発表①「近代建築の transparency に関する視覚文化的考察」（報告・尹 芝恵）②「フィクションにおける意味と指示について——ポール・リクルの物語論を中心に——」（報告・尾形太郎）③「美についての言説と本質的可能性——バウムガルテン、ヒューム、カントの美学理論をてがかりとして」（報告・長迫英倫）、レクチャーコンサート「『距離』との対話」（報告・能登原由美）。最終ページに第七十六回例会の案内を掲載した。

▼平成十八年十月十四日（土）

第七十六回例会は野外例会。廿日市市にある「海に見える杜美術館」を訪れた。JR広島駅北口に十三時に集合、乗用車に分乗して美術館へ向かった。折良く、同美術館では開館一周年記念展「京都画壇——師風の継承とその変化——」を開催中で、竹内栖風をはじめとする近世京都画壇の巨匠たちの作品を、同館の学芸員に案内していただきながら、ゆっくり鑑賞した。その後は海のみえるテラスでのんびりお茶をいただき、散会とした。参加者は二十二名。

▼平成十八年十一月三十日（木）

会報第九十号を發行。巻頭言は「マンガとMangaのあいだ」（清水修全）。前号に未記載だった第二十回大会報告、シンポジウムⅠ「ヒロシマの記憶と痕跡のかたち」（報告・大山智徳）およびシンポジウムⅡ「芸術学の変容——周辺領域からの提言——」（報告・川口佳子）。第七十六回例会（野外）報告「海の見える杜美術館見学」（大山智徳）。ほかにはエッセイ「プリペイドカードの旅」（袁葉）、イベントリポート「明日の神話について」（出原均）など。最終ページに第七十七回例会案内を掲載した。

▼平成十八年十二月十六日（土）

第七十七回例会を広島県立美術館講堂で開催した。最初はK・L・ファン・デル・レーウ広島大学客員教授の講演「子どものための哲学・物語と対話」。通訳は当学会の樋口聡委員（広島大学）が務めた。続いてはシンポジウム「子どものための哲学と芸術」。パネリストは香川龍介（画家・元広島市立毘沙門台小学校校長）、角田新（広島県立美術館主任学芸員）、三根和浪（広島大学教育学部助教授・美術教育）、三樹正典（広島大学附属東雲中学校教諭・造形作家）、司会は金田晋（広島大学名誉教授・美学）が務めた。参加者は四十名。

▼平成十九年二月二十日（火）

会報第九十一号を發行。巻頭言は「現代アートの現場から」（高原小夜）。第七十七回例会報告は、講演「子どものための哲学・物語と対話」（報告・川口佳子）とシンポジウム「子どものための哲学と芸術」（報告・長迫英倫）。そのほかはインフォメーションとして「東広島市立美術館特別企画展」「美学の将来」（金田晋著）発刊、映画『ちゃんこ』のDVD発売の案内など。最終ページに第七十八回例会案内を掲載した。

▼平成十九年三月三日（土）

第七十八回例会をひろしま美術研究所で開催した。研究発表の一つ目は、神戸大学大学院博士課程の平田 思による「アクションペインティングの変容とその政治経済的条件について」。

二つ目の発表は、広島市立大学大学院を卒業後、日本画家として活躍している長瀬香織による「日本画基底材としての和紙——日本・中国・アジア諸国における製紙法の比較を通して——」。例会後、ひろしま美術研究所近くのお好み焼き屋で懇親会を開催。例会参加者は二十五名。

▼平成十八年四月二十五日（水）

会報第九十二号を發行。巻頭言は「口元の美しさ」（小原啓子）。

第七十八回例会報告①「アクションペインティングの変容とその政治経済的条件について」(報告・田村桂子) ②「日本画基底材としての和紙―日本・中国・アジア諸国における製紙法の比較を通して―」(報告・陳貞竹)。エッセイ「一見如故」(袁葉)。インフォメーションでは、広島芸術学会の作家会員三名が出品している八千代の丘美術館「広島の作家15名の展覧会」、「未来美術館へ行こう! 柴川敏之展」記録集プレゼント情報を紹介。最終ページに第七十九回例会案内を掲載した。

▼平成十八年五月十二日(土)

第七十九回例会を開催。今回は野外例会で、広島県尾道市を訪れた。尾道は観光地としてポピュラーな場所なので、「ひと味違う尾道」を楽しんでいたと、尾道在住の末永航委員のアドバイスをいただきながらプランを作成した。

十時二十分にJR在来線尾道駅に集合。最初に訪れたのは「なかつた美術館」。日本では見る機会が少ない現代フランス画壇の巨匠ポール・アイズピリのコレクションをはじめ、梅原龍三郎、中川一政、林武、三岸節子、ピカソなど巨匠の作品をゆっくり観賞した。昼食は同館のレストランでいただいた。

タクシーに分乗して、本通りの中ほどにある「29 musee (ふくみューゼ)」へ。ここは江戸時代の脇本陣をギャラリーとして使っ

ている。大きな梁をふんだんに使い、歴史を感じさせる建物だった。江戸時代後期の画家、平田玉縷の屏風や映画監督大林宣彦の資料が展示されていた。次はここから徒歩五分のところにある庭園「爽籟軒」へ。江戸時代に両替商、塩田、新田開発などで栄えた尾道の豪商、橋本吉兵衛家の別荘の庭。昨年五月に橋本家から尾道市へ寄贈され、市が保存事業に着手し、この春、庭園は名勝に、茶室は重要文化財に指定したものの。

最後に訪れたのは「尾道市立美術館」。ポスター作家「レイモン・サヴィニャック展」を観賞して、喫茶室でお茶をいただいた後、散会とした。この日の夕方、浄土寺で「尾道薪能」があることが分かり、希望者六名が残り観賞して帰った。参加者は十五名。

《平成十九年六月三十日現在、法人会員四法人、個人会員二百十五名(特別会員二名、一般会員百九十一名、学生会員二十二名)》

(こめかど・きみこ 広島芸術学会事務局)